

DMS P/FU (DWIDP) JICA 便り

ネパール自然災害軽減支援プロジェクト・フォローアップ（水資源省治水砂防局）

No. 19 / 2006 . 4 . 17

「ナヤバルサコ スバカームナ（新年、おめでとうございます）」。4月14日（金）はネパール暦の新年初日の日です（2063年）。学校などはこの日を境に学年が上がります。ただし会計年度は7月中旬が切り替え時期で、この約3ヶ月違いは日本における新年と新年度の違いと同じ様なものと感じます。

カトマンズでは初夏の陽気です。これまでほとんど降らなかった雨も、夕立のような雷を伴うものが何度か降っています。雨季まではまだもう少し時間がありますが、少しでも電力不足が解消すればと願っています。

治安状況については、主要7政党による抗議プログラムとして、6日からのゼネストの呼びかけ及び8日に全国規模での大規模抗議集会が予定されていましたが（4月8日は1990年に民主化を実現した記念日）政府が5日未明に政党指導者等多数を拘束するとともに夜間外出禁止令の発令、携帯電話のカットを行いました。また政府は8日にカトマンズ市域等において日中の外出禁止令の発令をするとともに、デモ参加者への取り締まりを実施し多数の逮捕者を出しました。日中の外出禁止令は翌日以降も続き11日（火）まで4日連続で出されました（夜間外出禁止令は12日まで継続）。この間、デモ隊と治安部隊の衝突は各所で起こり、治安部隊の発砲により4名が死亡（うち1名は流れ弾による、デモ参加者以外の一般人）しています。我々の職場・住居のあるパタン市においても抗議行動は発生しています。テレビニュースでは、治安部隊が警棒にてデモ参加者を殴打する場面などが放映されています。

これらの動きの中、14日、ギャネンドラ国王がマスコミを通して年頭の声明を発表し、主要7政党に対して対話と早期の総選挙の実施の呼びかけを行いました。政党側は国王の声明は従来の主張の繰り返しであるとして抗議行動を継続していく構えで、15日にはカトマンズ市内リングロードにて数千人規模のデモが行われました。またゼネストも継続・強化され経済にも影響が広がっている模様です。

我々専門家は安全に十分注意を払いつつ、ネパールの災害の軽減を図り、災害で苦しむ人々が少なくなることを願って今後とも活動を続けていきたいと思えます。



警備詰所の破壊（パタン,9日）
（撮影：NFADメンバーの
Kedar N. Shrestha氏）



ジャーナリストによるデモと治安部隊
（カトマンズ,15日; Kantipur.com から）

マテマ前駐日大使に現地を見ていただきました

3月30日(木)、マテマ前駐日大使(Dr.Kedar Bhakta Mathema)にフォローアップ活動を実施しているブンガマティ地すべり地と、マタチェルタ地区災害復旧事業箇所の現地踏査に同行いただきました。マテマ前大使には日頃からNFAD(NGOネパール日本治水砂防技術交流会)の顧問として、ご指導いただいています。

今回はフォローアップで実施している箇所において現地を見ながらご指導いただくためお願いしたもので、武士専門家がブンガマティ地区を、中川専門家がマタチェルタ地区の説明を主に行いました。マテマ前大使からはそれぞれの現場において有意義なご指摘を受けることが出来ました。特にマタチェルタの現場においては、植生の復元の重要性についてご理解いただきましたが、現地においては砂防堰堤等で溪流が安定し復元した植生が、住民の方々によって伐採されており、先生自ら住民の方に経緯の聴き取りをされ、防災教育の必要性について強調されました。



ブンガマティ地区にて
マテマ氏(中央)と武士専門家(右)



マタチェルタの砂防堰堤上にて
マテマ氏(左)と中川専門家

主な出来事・トピック

ルクラからナムチェまでのエベレスト街道沿いの現地踏査を実施しました

4月2～7日にかけて武士専門家、中川専門家にてルクラ(Lukla)～ナムチェバザール(Namchebazar)間のドウ コシ(Dudh Koshi)川沿いを踏査しました。Mt.Everestも流域にある標高3～4000m程度の高さを流れる川です。以前に踏査したジヨムソン方面のカリガンダキ(Kaligandaki)川とは大変趣を異にする河川状況でありました。褶曲に見られる断層による地形で浸食が進んだ



ドウ コシ川(パクディン付近)



エベレストを背景に(シャンボジェ)
武士専門家(右)と中川専門家夫妻

渓谷が南北にほぼ真っ直ぐにて流下する此の川は、変成された火成岩の流域からなっている様に見られました。支川からの流出土砂量は本川の流線に左程影響を与えることなく、寧ろ本川の縦断浸食が激しい状況が伺えました。本川の河岸段丘崖が切り立ち、土石流の痕跡が顕著に観察されました。縦断勾配は目測で $i=1/70 \sim 120$ 程度。巨石による帯工機能の箇所が40～70m間隔にありましたが水密性が低く、各上流には土砂の堆積は認められませんでした。乾季の終期に入っているとの事でしたが供給水量は豊富な様でした。異常堆積した本川河岸段丘の表面には旧河床の痕跡として死川痕跡がありました。表面は白く光っておりましたが、石英砂の白さの様に見えました。本川の兩岸を形成する山々は節理の発達し

た露頭した崖からなり、崩落した崖推の上にシェルパやタマン族の小集落があります。表土はシルト質が多く粘性土は殆んど感知できませんでした。蕎麦とジャガイモは特産農産物でした。遠くに見えるサガルマツァ山は連山と肩を並べるようにしてあり、節理の発達した容姿はユーラシア大陸に如何にも乗り上げている様に見えました（なお本調査はシャンボジェまでのトレッキングの途上に行ったものであり、自費によるものです）。

日本大使館主催の ODA プレスツアーが実施されました

3月28日、日本大使館主催の ODA プレスツアーが実施されました。当ツアーは日ネ友好 50 周年事業のひとつとして、ネパールのメディアに対して、日本の ODA によって実施した箇所の紹介を行うもので、DMSP-FU で排水工を実施中のブンガマティ地すべりモデルサイトも見学の対称箇所となったものです。当日、DWIDP からは地すべり課のトラダール課長 (Dr.R.M.Tuladhar)、ギミレ技師 (Mr.B.Gimirhe)、ケンドラ工事監督官 (Mr.Kendra.B.Shrestha)、武士専門家、中川専門家が現地案内に参加しました。17 人の記者達に対して、説明は主にトラダール課長とギミレ技師によってネパール語にて行われました。記者からは質問も多く出され、熱心なやりとりがなされました。地すべり対策工について、メディアを通して広くネパール国民に知ってもらうことは重要なことと考えます。翌日のテレビで当地すべり地での見学の様子も放映されました。



トラダール課長 (左) と説明するギミレ技師 (左から 3 人目)

フォローアップ活動を進めています

災害復旧工事の竣工検査を 3 月 20、23 日の両日にかけて三箇所行いました。現場は、第 4 事務所管内のバクタプールとパタン市内の河川工事です。三箇所共、各区 (ワード) からの要望を元に抽出された箇所で、スケッチ・ワーク・ショッパ対象現場でした。布団籠の品質・土工の施工管理・対象構造物の設置目的の達成度等現地にて請負業者を入れて、議論を行う事が出来ました。特に丁張りの必要性、現地住民への事前説明、施工後の監視について、復旧事業体制確立には重要なことであるという意見も出されました。又、応急復旧工事や仮復旧工事を具体化し被害を軽度に取り除く事等も重要であるという意見も今回の工事で具体的に理解され始めたようです。



Balkhu 水制工



Bhaktapur 上流



Bhaktapur 下流

ヘイハチローの「ナマステ、ネパール」コーナー

(還暦を過ぎて、初めての海外、厳しい環境のネパールで技術協力・生活に取り組む「中川平八郎専門家」の「眼」で見た「ネパール」を紹介するコーナーです。)

ダンディズム (Dandyism) という事。

山口ひとみという作家で、“男の身だしなみ”と言った様な内容の本を二十歳代に見た事を思い出す。1930年代にスイスの銀行家とのインタビューで、煙草を吸っていると“まだ、奴隷根性の習慣を持っているのか?”という話題が出て来る。今、此の小文を考えながら、連れ合いに嫌われているパイプ煙草を吸っている自分がある。此の人生、“Dandyism”と言った事とは関係無かった様にも思える。

ネパールの女性が着ているクルタやサリーは、とてもオシャレだ。田畑で作業をする時は紅いクルタが風景に溶け込み、街角を歩く明るく淡い色のサリーはサラリとした風に舞い振り返りさせる。一方、何時も整髪に気を付けている殆どの男の服は、くすんでいて、形も西洋人のそれである。男達の服装だけでは季節は解らない。黒の皮ジャンを着て下に二三枚襟が見えている男の横には、半袖のカッターやTシャツを着ている男がいる。野球帽子を何時もかぶっている。事務所の中で仕事をしたり、会話をしたりしている時も。



“トピー”と言う此の国の帽子(何処で被っていても失礼にならない)が男性用としてある。少し硬い繊維で作った黒いのは王様の前に進み出るときや儀式に立ち会う時に、カラフルなのはお洒落用となっているらしい。市販のトピーは小さく、特注してもらった。タメル街にて最近販売されたドウラスルワール(Daurasuruwal)に似た新デザインのカッターシャツ様の物が手に入って気に入っている。この“ネパリアン・カッター”に特製トピーを被って出勤した。“アンパンマンの様なデカ頭が多いTAMANG民族とそっくりだ。”とスタッフが親しみを込めて笑う。小生の遠い先祖は、フラフラと此のヒマラヤを超えて中国・朝鮮半島を経て日本にやって来たのだとつくづく確信する一時でもある。

新採の現場にて“アツシさん”と言う名の運転手に会って教えて頂いたのは、四十年程前の事でした。“友人の結婚式には、こざっぱりした服装をして出席すること。現場では作業服は泥だらけでも良いが、自分で洗濯をした白いワイシャツを着て仕事をする事。”と。今、麻で作ったキャップ・作業着・溶接用皮手袋・日本手拭い・職人用地下足袋・ポールと縄間尺それに肩に担ぐ小物入れ用のリュックにて、現地スタッフと現場に出る。スタッフは平服に皮短靴である。矢張り日本人は“金持ち”で“物持ち”なのかな?

編集責任者：武士俊也、長期専門家：中川平八郎

電話：+977-1-5535502 Fax：同-5523528 E-mail：dmspfu@wlink.com.np URL：<http://www.dwidp.org>